意識

～２．価値を考えてみる～

■風景や文化でも飯を食える

大きなビジネスではなくても、利用者が喜ぶサービスを提供できれば、それは小さなビジネスとして成り立つことがある。資源と利用者の間を取り持つ人の知恵と工夫でチャンスや可能性は広がると言える。

○ビジネスに結びつけることができることを説明する（10 年続ける覚悟も説明する）～徳島県名西郡神山町～

神山のアーティスト・イン・レジデンスは、町からの予算で自転車操業のように運営をしているが、これまで応募した人にアンケート調査を実施すると、月約 10 万円なら自費を出してもよいという人がいると分かった。それなら、アーティストが滞在し、制作できる場をこちらで準備するなどによって、現在まで自分達が無償で提供していたサービスをビジネス化し、町の人にもメリットを分けることができると考えたのである。

「長いこと使ってない空き家を月３万円で貸してくれませんか」

そうやって貸してもらった空き家をＮＰＯで整備して、例えば５～６万円でアーティストに好きな期間だけ貸し出せば、空き家を持っている人も、今まで収入ゼロだったものが収入になる。そのような仕組みをうまく作れば、ビジネスとしても成り立つと考えている。

神山で活動するアーティスト

○ボランティアではなく、ビジネスという意識を持つ

～愛媛県宇和島市遊子地区～

平成 12 年に「段畑を守ろう会」を設立したが、当初地元の人たちは、「文化や景観で飯が食えるのか！」とあまり乗り気ではなかった。

段畑の復元と保全、後世に残すことの意義を話しあい、また、「ふるさとだんだん祭り」やコンサートを行いながら、視察の案内などの活動を続けてきた。そして、行政の助成を受けて直売所“だんだん屋”を建設し、ここで、段酌（焼酎）や馬鈴薯、ひじきなどの海の幸、山の幸を販売している。開設した頃は払える時給は 300 円だったが、今では 600 円払えるようになっている。

松田さんは、「ボランティアという言葉が大嫌いだ」と言う。それは、ボランティア意識や地域おこしという理念や論理で頭でっかちになってはいけない。まず手段を固定化し、戦略をたて、利益を出さなければ、長続きしないからである。

また、重要文化的景観に指定された畑でとれた馬鈴薯は、“早堀馬鈴薯”として、高値安定でブランド化してきている。耕作者の中には、“ブランド”と言って騒ぐ人もいるが、松田さんは彼らにこう言う。

「ブランドというのはあんたがきめるんじゃないんだ。消費者がきめるんだよ」

馬鈴薯への要求が高まる中で、いかに生産、供給、品質、広告における責任を向上させるのか、常に地元の人たちに“意識改革”を説いてまわる。それは、第一義として、“重要文化的景観である段畑の風景を守りたい”という強い思い故である。

だんだん屋

○負のものにも新たな価値があることを示す

～香川県香川郡直島町本村地区～

瀬戸内の島に残る原風景と言いながらも、直島の本村集落は一つの分岐点に来ていた。持ち主が都会にでて空き家が目立ち、家が朽ちていく。集落には朽ちた家は取り壊して新しい建物にしたいとの雰囲気があった。集落の中で負とされていたものをアートの力で再生し、新たな価値を与える。この再生を見守る地域の人にも、島の文化などを改めて見直すきっかけとなった。

「2004 年というのが、一つのターニングポイント。」と笠原さんは語る。4 月、本村地区に“まるや”というカフェがオープンした。これは、一人の女性が、直島に魅せられ、本村地区で“カフェ”を展開するという相談を、手紙にしてベネッセに送ったことに始まる。

当初、“まるや”のオープンについては、地元の人の中に賛否があり、新しいものに抵抗感を示す人もいた。笠原さんは、「まるや」の成功は、島のために絶対良いことだ」「新しい人が来て成功するということは、直島にとって大切なことだ」と、協力をお願いした。

ベネッセは、資本などで直接的に何か手を出すわけではなく、これまで“町”がしてくれたように、“民”と“民”で緩やかにバックアップする関係となり、現在では同様のお店が 7、8 軒できている。

カフェまるや

■自分達の資源が持つ価値を意識する

地域の日常に埋もれていると、自分たちの資源に気付かないことがある。地域に訪れる利用者や消費者が求めるものと、地域に暮らす人が求めるものが同じではないことに気付き、資源の価値を再評価することが必要である。

○地元の常識（日常）と外の人の非常識（非日常）の闘い

～愛媛県喜多郡内子町石畳地区～

石畳地区では、1993 年、水車に隣接して明治時代中期の約 90 年前の古い民家を移築して民宿を作ろうと試みる。しかし、地元農家 130 世帯の反応は「民宿やって誰が泊まりに来るんだ！？」、全員が「ＮＯ！」であった。「こんな田舎」という石畳の人が潜在的に持っている常識が頭を出した瞬間である。田舎の人が求める常識（日常）と都会の人が求める非常識（非日常）である。また、民宿の運営を託された「エプロン会」でも同じように問題が立ち上がる。民宿で提供する料理の問題である。村の主婦が考える“おご馳走”は自分たちが晴れ着を着て、松山や大阪に行ってオーダーする“レストランで食べるご馳走”だったのであるが、「石畳の宿」では食材をまちなかから購入することをご法度とし、周辺の山野や家庭菜園で採れる石畳地区の法事や祝い事などにつくっていた献立をもとに、宿泊者に料理を提供することとした。

「美味しかった」「素晴らしい料理だったよ」

田舎の価値というものを、宿に泊まったお客さんの喜ぶ姿や声が、初めて田舎に住む人自身に気づきを与えることになる。今では、この宿の人気の秘密は、エプロン会の主婦たちの手料理だとさえ言われている。

飾りのない本物であることが重要である。施設にしろ、料理にしろ、本物の田舎そのものを提供することに大きな価値がある。

「エプロン会」

地元の素材をふんだんに使った料理

石畳の宿

○常に地域の資源に価値を見出す～徳島県名西郡神山町～

神山町の山はほとんどが私有地であるが、NPO としては、これを芸術活動の場として使いたい。そんな時、山の持ち主に、草刈や間伐などの山の手入れを、NPO が無償でやりましょうともち掛ける。山の手入れについては、ワンコイン（500 円）で保険と昼食のための食材費を負担していただいた上で、参加したいという人がたくさんいる。身銭を切ってまでも作業をしたいというのは、そこで価値の大転換が起きている。つまり、山がきれいになったときの達成感はお金にはかえがたい経験となっているのである。そして、その人たちにとってその場所は、私有地ではなくパブリックスペースとして意識されているのである。

○子どもたちに伝える（次代に引き継いでいくことを考える）

～愛媛県宇和島市遊子地区～

2006 年から遊子小学校の６年が、段畑の開墾から石積み、馬鈴薯とサツマイモの栽培や収穫、加工まで自ら体験する学習が始められた。

昔は、たくさんの石を運んだために、荷こぶができたり体型が変わったりしたこと、その重労働のおかげで食を得ることができたことを、子供達は調べて学んだ。

「しんどい」は、現代の子供達の合言葉みたいなものだが、実際に体験してみて、写真で見ただけではわからない「しんどい」を味わって、この「しんどい」ことを続けた結果が今の水荷浦の文化をつくったことを感じ、それにより、ふるさとを見る目が変わり、段畑を保存する次の世代を築いていくのである。

粟生の森づくりの様子

意識

～３．活動を続ける楽しさを伝える～

■苦しい時に支えてくれる仲間

上手くいっている時は自然と人は集まるが、失敗したり、困難が見えたりすると人は離れていくことがある。そんなときでも苦労を共にする仲間には信頼と安心できる人間関係、目的と信念を共有した人間関係がある。

○単なる仕事にならないように、楽しむ感覚を持ち続ける

～高知県幡多郡黒潮町～

「Ｔシャツアート展」をきっかけとして始まった砂浜美術館の活動は、広く受け入れられ、年々注目を集めてスタッフは 30 人ぐらいにまで増えていた。その一方で、活動が数年経ち「また、来年もイベントをやらなければいけない」といった違和感が生まれ始める。最初は、面白くてやっていたイベントが、仕事のようになってきていることに、続けていくことに限界を感じ始めたのである。“楽しむ”という感覚を無くした時に、砂浜美術館そのものの考え方や意義を見失ってしまった。メンバーたちは、続けていく道を模索し始める。

1996 年に専任のスタッフを１名おく事務局を開設する。今まで”砂美人連”のメンバーが行っていたことを、事務局に移行していったのである。2000 年からは、人手不足の解消にイベント時のボランティアを募集する。このボランティアスタッフの存在は、今ではイベント運営には欠かせない存在となっていった。

Tシャツアート展

○失敗や行き詰まったときに残る仲間が本当の仲間

～徳島県徳島市～

平成元年に、徳島市の市制 100 年を記念して開催された吉野川フェスティバル。このイベントも最初の年は市が 1 億円の予算を用意し、多方面からのお金を集めて、1 億数千万円規模のイベントだった。

しかし、この水辺最大のイベントも、吉野川フェスティバル同様、徐々に参加者数は減少し、7～8 年経過する頃にはいわゆる廃れた状態となり、行政としても継続が困難な状況に陥った。

「吉野川の灯を消すな。下流の灯が消えれば、上流も廃れてしまう」

新町川を守る会のメンバーは、そのような思いを胸に、吉野川フェスティバルを引き継ぐための実行委員会を組織し、その実質的な担い手となる。新町川を守る会が吉野川フェスティバルを引き継いで 1 年目。盛り上げたい一心で様々なイベントを企画し、蓋をあけると、1000 万円以上の赤字。しかし、赤字になったからこそ見えてきたことがあった。この大赤字の吉野川フェスティバルをきっかけに、去っていったスタッフ、逆に集まってきたスタッフがいた。つまり本当にやりたいと思う人が残った。

こういった催しは、単なるイベントと考えていてはうまくいかない。地域づくりをしよう、川をよくしていこうという思いや発想がないと続かない。また、3 年とか 5 年であきらめていたのでは、お金を捨てているようなもの。10 年経てば、ノウハウを持った人が育ち、地域で活躍する。

実際に、吉野川フェスティバルのスタッフに長く携わり、上流域で活動している人も出てきている。

吉野川フェスティバル

■10 年続ける覚悟

継続は力なり。どんなことにも当てはまる言葉であるが、地域づくりも同じである。一時の流行りではなく、地域に愛着を持ち、地域に礎を築き活動していくことが何にもまして人々の心に響くのである。

○10 年続けると見方がかわってくる～徳島県徳島市～

徳島市新町川での守る会の川掃除も当初は「あいつは何をやっているんだ」という声や視線が多かった。たまのゴミ掃除にどんな意味があるのかという人もいた。「石の上に３年、川の上に 10 年」。何事も 10 年間は続けないと、と中村さんは言う。10 年間続けた今、市民の評価も川の環境もガラッと変わってきたことを実感している。

「もくもくとやる姿を見せることが大事」。ひょうたん島周辺には、「川にゴミに捨ててはいけません」という看板は立っていない。ゴミを捨てるなと怒ったり、注意したりするより、黙々とゴミを拾う姿を見せることこそ一番説得力があると考えている。

○10 年を経て、受け入れられた「本気」

～香川県香川郡直島町本村地区～

1985 年、福武書店（現在のベネッセコーポレーション）の創業社長福武哲彦氏と直島町長との間で、両者の思いや夢に共感し「この人とだったら」と直島開発の約束が交わされた。その後、直島文化村構想発表、直島国際キャンプ場オープンと島が動き出す。1997 年「家プロジェクト」が始動。角屋が 98 年、南寺が 99 年に完成した。町もこれらを行政計画に位置づけるなど二人三脚でやってきた。しかし、当初、島の人たちは、「ベネッセは本当にずっと直島でやっていく気があるのだろうか？」「藤田観光も 10 年はやったが、ベネッセはどうか？」と疑問を持つ人も多かった。

ベネッセが直島での活動を始めて 10 年を超え、更に、ベネッセハウスパークをオープンさせた頃には、「本当に、この島でやる気なんだ！」と、ほとんどの島の人たちに受け入れられた。

クリーンアップ活動

毎月 1 日と第 3 土曜日に実施

■仲間を増やし、活動を拡大させる

一つの種が大きな花を咲かせ、また次の種となり花を広げていく。いきなり大きな花を咲かせるのではなく、小さな花を次々に咲かせていくことで連鎖は広がっていく。成功している地域活動も、始まりは小さな花であることが多い。

○小さな活動が大きな成果となり、連鎖反応を起こす

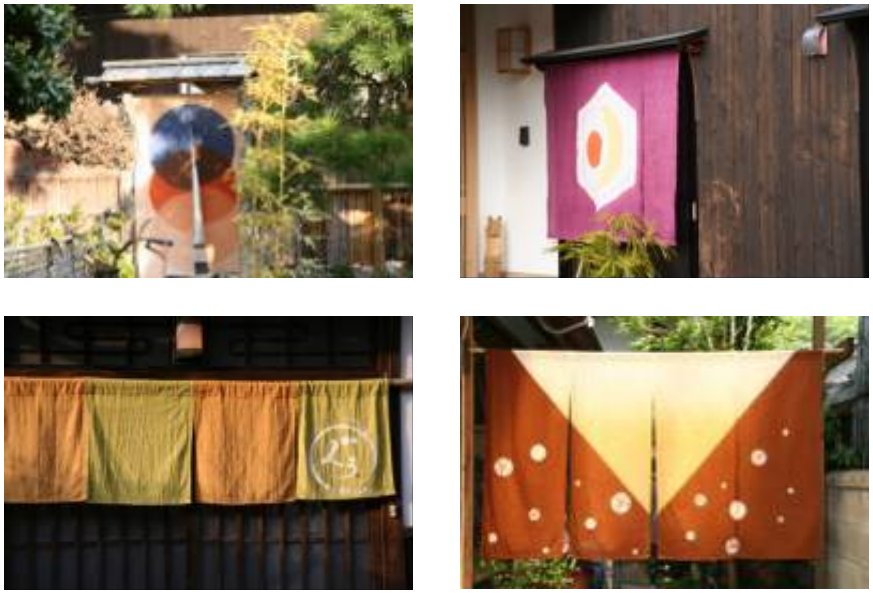
～香川県東かがわ市引田地区～

引田地区の合併を直前に控えた 2003 年の 3 月、ひっそりと第 1 回引田ひな祭りが開催される。当初は 10 名程度の方々による活動だった。それが、東かがわ市ニューツーリズム協会の情報発信をきっかけに、2007 年の第 6 回には旅行業者がツアーを組むほどに発展し、お雛様を展示する家も 60 軒を超えた。ひな祭りの期間はボランティア延べ 150 名が来訪者へのお接待にあたっている。祭り開催の実行委員会は、まち並み保存会、商工会、婦人会、子ども会ほか様々なグループの 10 団体程度で構成されるなど大きな連鎖反応を生み出すに至っている。

○成長し続ける回路として歩み続けること

～香川県香川郡直島町本村地区～

直島では 2001 年に「のれんプロジェクト」が始まった。展覧会の終了後に「のれん」を進呈したところ、それを使い続けてくれる家もあり、徐々に「のれん」を欲しいという家が出てきた。2004 年、「本村のれんプロジェクト実行委員会」を立ち上げ、2008 年までに 31 軒が参加している。まちづくりや地域再生に「企業」が取り組むときに、企業のスタンスとしては、企業の明確な目標や具体的な展望を見据えながら活動するだけではなく、その時々でコミュニケーションを図りながら、「アートの場として極めていくこと」「成長し続ける回路でいくこと」「小さくてもいいからやめないで続ける」という意識を絶やさず、一緒に歩み続けることが大切であると考えている。



のれんプロジェクト

○自ら守り、育てる活動の連鎖を生み出す

～愛媛県喜多郡内子町石畳地区～

「石畳を守る会」の水車復活事業の成功は続々と新たな事業の着手を推し進めることとなった。水車は第２第３と継続し、第 2 の水車は内子町の事業と連携し「石畳清流園」として公園整備がなされ、茅葺民家の復元も行われた。この民家が後の「石畳の宿」へと続く。第 3 の水車は会員が石工作業などをして貯めた資金で製作を行った。水車は単なるシンボルと言うだけでなく実際に精米や糠取りの道具として活用。その維持管理も会員の大工さんが担当している。このような地域活動は、その周辺の各集落や自治会へも大きな影響を与え広がっている。その佇まいが有名となった屋根付橋の保存・改修作業もその一つである。

地域の資源を慈しみ、自らで守り、育て、地域の魅力づくりが行われている。そうした活動を通して、新たな担い手を育て、持続するむらづくりを目指した活動が行われている。この活動は周辺にも連鎖を生みだし、石畳の東集落にも波及を生んでいる。

○住民総出の共同作業が生み出したパワー

～愛媛県南宇和郡愛南町～

1984 年に地域のシンボルづくりに地区の住民総出の共同作業によるへんろ道を復元することを目的として『柏を育てる会』が結成された。当時は、役場を退職した人が、補助事業を住民に下ろそうと、リーダーになって活動していた。みんなが元気になるシンボルを作ろう、地域がまとまる仕組みを作ろうと頑張っていた。それまでも、郷土芸能を興すとか、子供達のお田植え祭りや稲刈りをするとか、古い踊りを教えるなどの仕掛けはあったが、これからは大きい目標をやっていこうと、同時にあいさつ運動やお接待を仕掛けていった。復元から約 20 年、一人の力ではなく住民総出のパワーがあったからこそ続けてこれたのだと、会のメンバーの誰もがそう考えている。

トレッキング・ザ・空海
緑が豊かなへんろ道を歩く参加者

トレッキング・ザ・空海

○無理に強要しないのも継続のコツと心得る

～徳島県名西郡神山町～

各事業のやりとりは専らメールで、しかも事務局からの一方通行の事務連絡に徹している。電話やファクスは極力使わない。電話やファクスでは返答を求められることが多い。これが逆にプレッシャーとなって、欠席が続くと参加しづらくなるものである。

例えば、「先月も先々月も私行けなかったから、皆さんに気の毒やな」というような気持ちを持たせるということは、今度の活動への敷居を高めていることになる。その敷居が徐々に高まってきて、もう全然来なくなることがよくある。だから、後ろめたい気持ちをできるだけ感じさせないようにするためには、「返答はいりません」とすること。そして、参加できないことに対する言い訳を作る必要がないようにしているのである。

出典：グリーンバレーのホームページ「イン神山」
http://www.in-kamiyama.jp/

取組

～１．お金はめぐってくると信じる～

■気持ちの交換を図る

多様な価値観、多様な人々が暮らす現代社会では、自分のことだけでなく相手のこと、まわりのことを一層考えなければならない。自分のまわりが幸せになることにより、自らも幸せになるといった柔らかな発想も必要である。

○他のもので代替できないかと考える～徳島県名西郡神山町～

神山町の活動は、お互いの Win-Win の関係をつくること、言い換えると「気持ちの交換」が重要であると考えている。

例えば、周辺の山の私有地を芸術活動の場として使いたい。そこで、草刈や間伐などの山の手入れを NPO が無償でやりましょう、その代わりに自由に活用させてくださいとお願いし協定を結んでいる。カミヤマアートは、武蔵野美術大学の先生と学生さんに本来は謝礼金をお支払いするところを交通費程度だけで来ていただいている。アーティスト・イン・レジデンスの企画や運営に際して学生をインターンシップとして受け入れているからである。

お金がなかったらできないという固定観念は捨て、他のもので代替、交換できないかという頭のサーキットを常に回し続けるほうがよい。

○相手をよくしてあげようとする社会貢献の意識をもつ

～徳島県徳島市～

新町川を守る会の中村さんは、自分のところを良くしようと思えば、まず相手のところをよくしようという気持ちが先決という。

例えば、吉野川の上流にあたる山には木を植えに行っている。上流を良くすれば、下流も良くなるし、今度は上流の人が下流のために動いてくれる。行政と仕事をするときは、行政の担当者がほめられるように、担当者を困らせないようにすることが大切であると考えている。

現在のように物が余るような時代には、自分のところだけではなく相手や他の場所をどれだけよくできるか、言い換えれば社会貢献できるかを考えることが求められる時代であるという。

新町川を守る会の植樹活動

■お金がなくてもやりたいものをやる

地域の活動の何が大事なのか。お金は大事なものであるが、それは目的を達成するための道具のひとつである。いかにして目的を達成するためのプロセスを楽しむか、意味のあるものにできるかを考えることも重要である。

○補助金よりもソフトを磨き上げる～徳島県名西郡神山町～

グリーンバレーの活動において、一番大事なことは、ソフトの資産を磨きあげることにある。そして、それが実ったときに収穫する。お金については、常に渇望状態にあるが、無理に補助金を取りに行くようなことはしないようにしている。言い換えると、お金がなくてもできることをやっており、補助金の意味合いは、時間をかければできることをより短い時間でやってしまうための手段のようなものと考えている。

○地域がよくなることが自分たちへの配当と考える

～徳島県徳島市～

新町川を守る会の中村さんは、これまでの活動をふり返ると、「大変だったけど楽しい、楽しむことが大事である。」という。まちが変わり、人が変わり、市民の地域への誇りが高まっていくのを実感している。地域が良くなっていくことが自分達への配当であり、自分達が活動することで地域がよくなればそれでよいと考えている。

ひょうたん島クルーズや、今年度から始めた撫養航路も、もう少し乗船料金を上げてはどうかという人もいるが、自分達が儲かることではなく、市民に乗船いだいて川を見てもらうことが一番大事であると考えているため、値段は上げないでいる。市民が川に来て、安い料金で乗船して、自分達の活動を知ってもらう。それで川が綺麗になるなら、活動資金の確保より、その方が地域づくりに重要であると考えている。

ひょうたん島クルーズ